



## 「楽しむ」と「楽」は同じ字なんだけどなあ

ちょっと前のゴールデンウィーク。今年は、5連休と割と長めのお休み期間になりました。そのゴールデンウィーク明け、子どもたちに今年のゴールデンウィークの長さについてお尋ねをしてみました。約7割強が「もっと長いほうがいい！」約2割が「ちょうどいいかなあ」そして、約1割弱は「もっと短くていい」。私なんかは、いつまでもお休みがいいというお子さんに、大賛同です。無趣味、無特技の私なので、連休といっても特にすることもなく、だらだら楽しんで幸せに過ごすだけ。何もすることないのに、もっと長いほうがいい。

むしろ、ちょうどいいや短いほうがいい、と答える猛者の気持ちを聞いてみたい。

「楽しんで過ごしていても、楽しくない」

すごい！「楽」という同じ字なのに、違う意味。そのとらえ方のすばらしさ！

とともに、楽しんで楽しむもうとしていた自分が恥ずかしい…(学校通信 No. 7「楽しむ条件」もご参照ください)

今、あちこちで新しい教育のカタチが示されています。その教育の中で、育てたい力(私たち教員はそれを資質・能力と言います)を文部科学省は次のように示しています。

- ①生きて働く知識・技能
- ②未来の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等
- ③学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性

特徴的なのが、③ですね。簡単に言うと、やる気とか粘り強さとか、そんな人の性格みたいなもの。とはいえ、これまでもやる気とか粘り強さなどは割と大切にしてきたところ。しかし、③のような資質・能力は“生まれつき”そんな力が備わっているし、備わっていない子には身につけられないものだと思われている節がありました。先に書いた、素敵なお子さんのようなすごい考えは、その子の才能のようなもので、生まれついてのものだから育てようがない、と。性格は磨きさえできるが、育てるものではない、と。

それが、どうもそうではない。その人の考え方次第だということです。考え「方」なので、学ぶ方法がある。方法にまで落とし込めるならば、子どもたち自らその考え方を身につけることもできるし、変えることもできるじゃないか、という理屈です。

では、どうすれば自ら変えられるのか。それは、自ら変える経験とその自覚化です。失敗から学び、成長できた経験はだれしもあるもの。しかし、その経験を思い出にしてアルバムに張り付けて終わり、となることが多い。ここで、その経験の細分化や意味を編みなおす活動が大切です。つまり、経験を言葉にすることです。だから、一番簡単な方法は日記です。

と書くまではよかったです。これがまた続かないんだよなあ～。また三日坊主で終わってしまう日記を目の前に、楽しんで楽しむ生活に抗えない今日この頃です。とほほ…